

又右衛門(荒木又右衛門)伊賀の人。柳生十兵衛門。寛永十一年、義弟渡辺數馬に助力して伊賀上野にて、河合又五郎の一党十数人を切り、名をあげた。因州藩主池田侯に随身して千石

附合十七体

芭蕉が遠境の門人に示した付け方だが、人々が迷うのを恐れて破棄したという

北枝(立花北枝)

享保三年没。兄牧童と共に研刀を業とした。芭蕉十哲の一人。伊勢派の祖

八方自他伝

立花北枝が人情の句の続け方について三年工夫し芭蕉にも見てもらったもの。元禄五年の奥書がある

猿蓑

元禄四年刊。芭蕉七部集の中で特に重きをなす集

鶯の羽も

「猿蓑」の中の一巻。去来、芭蕉、凡兆、史邦の四吟

からして、旧連句の方で、普通の連句の方で、きらう事をしてね。それを言うかね、いや、それは旧連句では嫌うが、新連句ではいいと、一向かまわないというような事をいう。それでわし、これを馬鹿にしてね、それは丁度、講釈師の種本だと。講釈師の種本というのが、荒木又右衛門の伊賀の上野の三十六番斬りというのを、今晚はやりませんが、伊賀の上野の旧家の土蔵から、写本が出てきたのをずっと読んでみましたが、それは大筋は同じであるが、所々違ふところがありますから、今晚それによつてやります、と言や、いかげん出たらめやつてもかまわねえだ。そこが違ふところだて。

雅 ここにあります、北枝あて、加賀の北枝あてに附合十七体、十七条ですか。その文章を読んでみますと、

「附合十七体、別紙に記進候。初心には見せ申されまじく候。術のなはぬ内に此味をつけんといひし、却而一句もとのはず、付意もしれぬ事に成もの候、又むつかしきもの也……」

(この手紙は偽作であることが現在では定説である——東・註)とまあ、こういう文章なんですけどね。

文 その通りだだ。

雅 で、この宛名が北枝になっておりますから、先生がこの間お示し下

さつた北枝の八方自他伝というものも、おそらくこの辺から出たことだと思ひますが。

文 そうだだ。そういうものからね、三年の工夫をしてというわけだね。ところがね、あの付方自他伝はまあ一応の基準であつて、それで今度は千変万化になつて来るだ。

雅 ハア。

文 何でもあれから言えば、三句ならんでいいものは何も無い。自でも他でも人情なしの句でも。ところが、芭蕉の連句になつてくると、それが自が三句ならんじゃいけないというのでも、それは何だつたら、変化しないからいけないというのであつて、変化していればいいという。

雅 ウン。

文 そりゃ、どういう風に変化するといへば……、まあ、あの巻でいうと、

さし木つきたる月の朧夜

苔ながら花に並ぶる手水鉢

雅 ああ、「猿蓑」の「鶯の羽も」の巻ですね。

文 そうだだ、「猿蓑」にあるだ。

苔ながら花に並ぶる手水鉢

これは自でしよう。
ひとり直りし今朝の腹だち
自でしよう。

いちどきに二日の物も喰て置
自でしよう。それから

雪けにさむき嶋の北風

雅 ああ、ここにありますがね。エ、

苔ながら花に並ぶる手水鉢

これは芭蕉の句、自ですな。

ひとり直りし今朝の腹だち

これは去来。自です。

丈 ウン、前の並ぶるは、次の付けによって自にも他にもなる。その腹
だちがおおるといふのは、鉢をならべたりしているうちに自然と直ると
いうのだから、これは自ですな。

雅 なるほど。

丈 それからして、その次にいつてね、

いちどきに二日の物も喰て置

雅 これは凡兆ですな。

凡兆（野沢凡兆）

正徳四年没。享年未詳。

金沢の人。京都にて医師
をいとなむ。妻とめは羽

紅尼

史邦（中村史邦）

俳人。蕉門。五雨亭。尾

張犬山の人。没年末詳

丈 これが自ですな。それからしてね、

雪けにさむき嶋の北風

雅 史邦ですな。

丈 それが寒いというから、自の句でしょう。

雅 自ですか。

丈

火ともしに暮れば登る峯の寺

これも自でしょう。

雅 ハア。

丈

ほととぎす皆鳴仕舞たり

これは人情なしで、そで、ここんところ五句ばかり自の句が並んでいる。
これだぜいいかと言え、見事によく進展しててすな。このように
見事に転じて進んでいればそれでいいと、芭蕉の心法というのはこのこ
とですな。心の法というね。そうだと、わし、何あの九州のね俳文学会
の時（昭和三十七年。於・太宰府俳文学会総会―東註）、心法をまあ何だ
だ、

あはれさの謎にもとけじ郭公

芭蕉の心法

八方自他伝にとらわれな
い芭蕉の転じの方法。付
けでは「あるものは付く、
無いものはつかぬ」、「根
を切れ、続きをいうな」
であり、転じでは「付方
自他伝」の手法を重んず
るが、それにとらわれな
いものと思われる。

昭和二十五年一月、東京で結成された。初代会長・小宮豊隆。連歌及び俳文学の研究団体

冬の日

俳諧選集荷弓編。貞享元年刊。芭蕉が前年名古屋で野水、荷弓、重五、杜国らと興行した五歌仙を取める。芭蕉七部集の第一集

三郎(宮本三郎)

明治四四年―昭和五六年。著書に『蕉風俳諧論考』他。俳号は三良、のち雨棠。東京都生れ。蕉風連句の研究に新機軸を出した

市中は

『猿蓑』の中の一歌仙。凡兆、芭蕉、去来の三吟

秋水一斗もりつくす夜ぞ

(『冬の日』・「狂句がらしの」の巻)

のね、あすこを話して、そしてその次に心法について話しはじめたら、時間だということもんで、やめたけどね。そういうふうなところが、片っ端から芭蕉の連句を読んで行ってみりゃ、いくらでもあるですだ。

雅 ウーン。しかし、ここは考えようによつては転じていませんね。連句をいま作っている人たちは、そう考えておりますけれど、学者、たとえば宮本三郎先生などはどう考えておられるでしょうかね。

丈 宮本三郎さんがね、わしがやったあと、「芭蕉の連句の一手法」というのを発表してね。それからまあ、その質問時間がまあ五分ある。それから、わしね、

足袋ふみよごす黒ぼこの道

追たて、早き御馬の刀持

でつちが荷ふ水こぼしたり

というのをね。

雅 あれも「猿蓑」の「市中は」の巻でしたね。

丈 あれをわしね、芭蕉のいくら捌きでも、ありゃ、わしやどうも気に入らないと、

追たて、早き御馬の刀持

御定免の馬でね、ハイヨウハイヨウと言って煙たつてとんで来ると、刀持を後ろにひかえてと。それからして

足袋ふみよごす黒ぼこの道

この道は馬をよけたことになるだ。そしといて、その打越にもつていて、

でつちが荷ふ水こぼしたり

と、一方は担った水をこぼす、一方は足袋をふみよごす、と風車の廻るような。

雅 輪廻になりますね。

丈 そういうものはわし氣に入らねえといった所が、宮本さんはね、それは足袋ふみよごすのは刀持の足袋だというからして、刀持の足袋なんでものは、初めからして足袋はだしで、汚れるなあたりめえで、それじゃいけねえとそれから、ま、二、三押問答、それも五分きりだもんで。

それで両方で手前の言いたいことを言つて別れちまったけどね。宮本さんあたりだつてその程度ですだ。

雅 じゃ、要するに自と他とが分からないというわけですな。

丈 自と他が分からねえじゃねえ。その運びだね、運びを、その本当の

運びが分からねえだ。

雅 ウン。

丈 それだで、わしどうもね、何か見たり聞いたりするのがたまらないですだ、芭蕉の真髓を伝えるものがね。

雅 八方自他伝は。

丈 それは一応のお手本だだ。それはそれつきりに泥どろんでる人があるだ。中にはね、そいつを一つもはずれば全然いけないといってる人があるけど、それじゃまるで琴柱ことじに膠にかわ、になつてしまふだ。

雅 ウン。

丈 それでね、まあ、付けはこびのそういうところを、どうしてもさつてもらわなけりや、いけねえだ。やはりあの、「狂句こがらしの」の巻だけでも、

日のちり／＼に野に米を茹

と、これは折端だ。これは後の付けによって自とも他ともなる。それからその次だがね、

わがいほは鷺にやどかすあたりにて

そうするとね、わがいほは、という人が稲を刈るといふじゃ、いけねえだ。

わがいほは鷺にやどかすあたりにて

という、一寸離れ家の森の際か何かの庵におつて、それから夜、森に鷺が来て泊る場所だと。

雅 そうでなけりや、おもしろくありませんね。

丈 そすとね、それから見たことになるだ。日がちりちりしているに、まだ稲を刈っているなど。それからその次にね、

髪はやすまをしのぶ身のほど

雅 そすと、これはすぐ恋の句になるわけですか。

丈 これは恋だ。それで、あの気楽に髪かみの伸びるまで遊んでおいでなさいと、忍んでおいでなさい、と。こうすると、その稲をかる人と、鷺に宿かすという人も皆、人がちがうだ。

雅 なるほど。

丈 それからして、その次に行つて、
いつはりのつらしと乳をしほりすて

これはその髪をやす人だ。何を偽りしたか、偽りの結果が乳をしほりすてる、子供を産んだけれど、子供はどうしたか、もう手元にはおらんんで、乳をしほりすてる。その句は自じゃねえ、それは他だ。それからして

きえぬそとばにすごく／＼となく

と。そうすると、その泣く人は乳をしほりすてる人だ。それも自という人がいたが、そんなもの自じゃねえだ。「すごく／＼となく」なんて、自分が自分をそんなに言いようがねえじゃねえか。他にきまつているだ。

雅 なるほど。

丈 けど、その髪はやす人と乳をしほる人は同じ人だ。

雅 それを、よそから見ているわけですね。

丈 それから、その次いつてね、

きえぬそとばにすごく／＼となく

というもんだで、亭主が死んだか、子供が死んだかして、まざまざと新しい卒都婆が立ててあると。

雅 その次は

影法のあかつきさむく火を焼たきて

ですね。

丈 そすると、これは何だだ、偽りのつらしという人じゃなしに、

影法のあかつきさむく火を焼たきて

これは誰でもいいだ。

雅 ハハア。

丈 そこいつて、

あるじはひんにたえしカライエ虚家

と。そすると、その主人が火をたいていることになるだ。こういうところの運びをよく分かることが大切です。その分からないものがアレコレ理屈でやって行ってもね、芭蕉の連句は理屈じゃねえからして。

雅 この歌仙は出勝ではなくて、順に付けて行ったものでしょうね。ま、芭蕉が捌いたのでしょうけれど。

丈 それはまあ、それだけの人がよりあつてやったわけだね。それで学者はこんな事をいうです。佐々醒雪なんて人が、まあ、芭蕉をえれえ研究した人で、わし見ないけれど、何か俳諧講座で述べていたというのを聞いたことがあるが、連句というものは、お風呂の中で大勢がやがやいろいろ喋るようなもので、順々に、ヤ、実はこんな事があつた、どんな事があつた、と言っている。なるだけ大勢な方が、とつぴな珍しい話も交じってくるからして、おもしろいのだ、連句というものはそういうものだ。いや、とんでもねえことをそれでも言ったもんだと。

雅 ウーン、それはちよつとうなづけませんね。

丈 そんな乱暴な、そんな下等なものじゃねえだ。

雅 そらそうでしょう。連句もずつとたどつて行けば、連歌から来たい

出勝

付け順の方法の一つ。乱吟で、出勝乱吟ともいい、付勝ともいう。俳席で一巡の後、各句ごとに連衆すべてが付句を出し、宗匠が捌いて治定するやり方

醒雪（佐々醒雪）

明治五年―大正六年。俳諧史研究家。著書『連俳小史』は本格的な連歌俳諧史の嚆矢

連歌

百韻、歌仙と形式が定まったのは院政時代で、室町時代に特に盛行し、次の俳諧のもとをなしたが、江戸時代にはすたれてしまった

支考（各務支考）
寛文五年一享保一六年。
美濃の人。蕉門十哲の一人。芭蕉没後、美濃派を樹立した

ろいろの方式を守ってやっているわけでしょうし、お風呂の雑談など失敬千万ですね。それは飛んでもない話ですが、連歌から連句になってさらに発展したものもあるようですね。たとえば、今おっしゃった自他の別などは、連歌の時代には見られなかった、新しい方法でしょうね。

丈 そういうことばかじゃねえ。付け肌というものがね、全然違うだ。それで、支考がこんな事言っただけね、支考のいう事を皆馬鹿にするけど、支考の言うことも初めのうちはとても真面目だね。

雅 ええ、芭蕉は支考を非常にほめていますよ。

丈 それはそのわけだ。去来やなどは、芭蕉がぐんぐん進んで行くのにあとについて行ききれないで、猿蓑の撰をやったで、もうこの辺で止まってくれればいいと。それに芭蕉はそうじゃない、どこまでも無窮動で行ってしまう。そでで、

八九間空で雨降る柳かな

という句の意味が分からなんだ。ところが支考はそんな時分が二十代で、今入って来たばかりでしょう。前の方のことは知らねえからして、今の芭蕉の言うことがよくのみこめるだ。一番新しいことの分かるのは支考だ。だから、支考がかわいくてならねえだ。だで、死んだ時、あの遺物や何だつて、支考に大変くれるけどね。

雅 いや、あの手紙でもね、支考は百人に一人の傑物であるというようなことを書いておられますね。

丈 それで、その支考の言ったことに、「句に新古なし、付けに新古あり」と。あれは何だだ、いま言ったね、「八九間空で」の巻にある、

初荷とる馬子もこのみの羽織きて

庭とりちらす晩のふるまひ

というところ、それを直してね、

内はどさつく晩のふるまひ

としてあるが、初荷とる馬子というのにもって行って庭とりちらすじゃ、荷をつけたりおろしたりして庭とりちらす、とそれは古風です。その付けは根が切れていないだ。荷物をつけたりおろしたりして庭とりちらすと、それを

内はどさつく晩のふるまひ

と根を切っちゃまってんだ。突き放してある。

雅 俳諧の貞門時代のものは、談林時代の心付け、それから蕉風になつての句付け、何ですか、まあ、そういう付け方が芭蕉の連句の芸術性を高めたものですね。

丈 それも宗房といった時にね、貞徳翁の十三回忌追善の百韻を寛文五

貞門

俳諧流派。俳風の上から談林蕉門に対して古風といわれた。松永貞徳を首班とする一派及び、その俳風の呼称

談林

俳諧流派。貞門から蕉風への過渡期の宗因風俳諧

句付け
余情付のこと。前句の余
意、余情をもって付ける
手法

宗房（松尾宗房）
芭蕉の本来

蟬吟

俳人。藤堂氏。名良忠
字宗正。称主計。藤
堂藩・伊賀上野城代新七
郎良精の三男。寛文六年
没。季吟を師として俳諧
を学んだが、二五歳で没
す。芭蕉が近侍として影
響を受けた

年十一月十三日、これはね蟬吟公の立句で、
野は雪にかかるれどかれぬ紫苑哉
と、

鷹の餌ごひと音をばなき跡
それにその次に、

飼狗のごとく手馴し年を経て

鷹というから飼狗と付けるだね。

雅 鷹と犬、物付けですね。

丈 それからして、四句目が

兀はたはりこも捨ぬわらはべ

と犬というから、張子を付けた。

雅 ハハア、犬張子。

丈 その次へもって行つて

けふあるともてはやしけり雛迄

雛を張子人形ととりなして付けただね。それからして芭蕉が付けたがね。

月の暮れまで汲むもゝの酒

と。ウン

長閑なる仙の遊にしくはあらし

と。まあ桃だからね、仙というような文字をもつてくると、

景よき方にのぶる絵むしろ

と。あそぶというから絵むしろと。それから、

道すぢを登りて峰にさか迎

雅 アア、坂迎えですね。

丈 それから、こんどは

案内知りつゝ賣る山城

と、峯にむかうちゅうとところで、それから今度は山城を攻めると、

あれこそは鬼の窟と目を付て

と。次は

我大君の国とよむ哥

雅 ハア、謡曲・大江山の文句取りですね。

丈 これ、百韻を全部読んで行つてごらん。これが芭蕉のいう、その

古という。

雅 ウン、物付けの時代。

丈 古風のね。

雅 そうですね。

丈 これがその、そういう付けはすべて古であると。

貞徳（松永貞徳）
俳人、歌人、歌学者。元
龜二年（承応二年）京都
に没した。俳諧を文芸の
ジャンルとして確立し、
貞門の祖として一時代を
築く

雅 寛文五年ですから無理ありませんね。貞門のマア、最後の時代で
すね。

丈 それでね、芭蕉の連句について、わしがね一文を草したことがある
けども、「芭蕉の連句は万葉の誠を魂となし、宗祇の白河百韻の付味より
三句の転じを工夫したるもの、尊き哉五歌仙」というね、そういう文を
作ったけれども、まあ、芭蕉の連句をわし忖度するとね、「誠の外に俳諧
なし」、それからして「造化にしたがひて四時を友とす……」。自然を詠
め、誠をよめ、とこういう事です。それで言ってみれば「あり得るも
のはつく、あり得ないものはつかない」と、例の『笈の小文』の冒頭に
あるです。蕉風というのはそういうもので、それで前にも書いてあげ
たけれども

杉戸あくれば句ふ梅が香

という前句に、貞徳流では

鶯の歌の友達たづねきて

と、梅に鶯と、まあそういう風で、その次の談林はどうだと云つたら、
春の夜の闇はあやなし手水鉢
と、

わがせこが来べき宵なり頭痛持ち

というような、あれは衣通王の歌だね、「わがせこが来べき宵なりささが
にの蜘蛛のふるまひかねてしるしも」のもじりだね。談林は時期が短い
からそんなこともまあ出来たが、それ永くやつて行くには、やはり自然
でなけりや種つきちまうだ。芭蕉の発見したものは、自然に従って自然
を詠んでゆくでなけりやだめだと。それはアノ狂句木枯の巻の何だだ。
髪はやす間のね、あの前後の付け筋と、この人とこの人はちがつている。
この人とこの人は同じだという、その運び具合をね、よく会得するとい
うことが、まずもって一番大切だ。

雅 成程、そうですね。

丈 それをお風呂の中でガアガア言ってるね。

雅 いや、そんなもんじゃありませんよ。

丈 そういう、そうだって、何か講義録ちうだ、醒雪の。

雅 いや、僕はこう思うんですよ。連句の芸術性というのは、連句のあ
の形式でなければ詠めない、あるいは発見できない詩です。その詩を
もりこむ、たとえば和歌なら和歌でとらえられる詩情というものがあ
ります。俳句は俳句でどうか、発句は発句で、川柳は川柳でとらえら
れる詩の領域がある。しかし、この、連句でなければとらえられぬ詩情、
これは何か。それは雅と俳（滑稽）の微妙にミックスされたものの中に

炭俵
俳諧選集。七部集第六集。
志田野坡・小泉孤屋、池
田利牛共編

伊良湖崎
愛知草渥美半島

龜山
三重草鈴鹿郡。現龜山市

あるのではないか。そう思つて、「冬の日」や「猿蓑」、あるいは「炭俵」を読んでみますと、なるほど、芭蕉はうまくそれをとらえた、というところが多いんですがね。

丈 それでね、儂、伊良湖崎みに、豊橋の連中と五人ばかりで行つて、それから龜山という所の校長の浜田先生がよつてくれるというのでね、浜田先生のうちへ寄つて、それから龜山の学校へ行つてね、それからまあ、発句の話したりしたその中に一人の先生がね、連句の付合非文学というのに対しては、どんなお考えだかと、こういう。それからいろいろと話して、そのあけの日には、何だか、学校へ泊つてね、女の先生たちが、お鮎やおむすびこしらえてね、お弁当こさえて、先生たちも三人ばかり、それからその小使さんにお櫃ひつちしよわせて、行つた所が、伊良湖崎のあの村は皆おひつこししちやつて、からつぽになつて。

雅 ハハア、戦時中ですね。

丈 戦時中、大砲の弾丸の性能をためすために、伊良湖崎の海のはなつこの所に、大きなコンクリでね、たまのあたるところをこしらえて、それがためにまあ、一切のもの皆、宮山の陰へ、お宮でもお寺でも学校でも役場でもね、皆移しちまつて、広い野原になつて、その鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎

の碑がね、大きな岩の上にあつて、それをあすこの司令官がね、脇へ移して、それから戦争が済むとまた、元の位置へ直してくれたという、その何とかいう中將だというがね、マア、いい事をしてくれた。疵も付けないように兵隊たちにやらせつらけど、それから、そこで何だか、その岩の上でね、お弁当ひらいて。そしたらそこがちょうど、まあ、連句の説明に都合のいい所だもんで、そのまあ、よんべの話じゃお分かりにならないか知らんが、ちうわけで、それで発句はそりゃ大きな松ね、二人で抱きついでみて二抱えあるだ、こんな大きなのが、ズーッと浜辺だから、高くなくて枝がその岩の上ののして、岩がまあ農家のかなり大きな土蔵を横にねかしたようなもので、その上が平らで、碑があつて、それからその続きが芝や雑草が生えてね。その上に坐つてまあ弁当ひらいて、それで、例えてみれば、発句はこの松だと、どっちから見てもよい松で、それにこの大きな岩、ここへそえりゃ又一そうよくなつてくると、これが脇の役をしていると。それで絵に書いても写真に撮つても、松ばかり撮り、岩ばかり撮つたじゃ、いくらいい松でも、いくらいい岩でも、おもしろくねえ。このそばへこうした大きな岩、そしてその上へ枝をはっている松、両々相俟つてとてもいい風景ができてくると、発句と脇の關係はこういうもので、それから第三はどうだといったら、青々としてい

晩山（爪木晩山）

享保一五年没。京都の人。著書『千代の古道』他。

二白、俳諧御執心之由、先は珍重、物しりにならんより心の俳諧肝要に御座候。句者は沢山御座候得共、心法を守る人ハマレ／＼なるものにて候

一、季よせの御不審御尤に候。愚老は此事にうとく候儘考へ跡より可申入候。増山井御用可然候はせを

十七日

晩山様

（校本芭蕉全集 第五卷 三〇八頁）

る海の方から薫風がおもむろに今来ていと、これが第三だと。それで、

岩と松といくら一緒に置いても、松の根が岩にもならんし、岩がそれじや松にもならない。岩は岩、松は松、別のもので、薫風というものが海のむこうから吹いて来るのも別に理屈じゃないと。それから、四句目は

どうだと言ったら、ここで御同様、弁当を使っている。これが四句目になる。それから五句目の月はこの神山というだね、宮山という山があつて、それは何だだ、伊勢の大神宮様へ面したところは千古斧鉞ふくせんの入らない古い林がね、ずっと一面に、この山の上へ月が上つてくると。それから折端はどうだと言ったら、この山で何か珍しい幽禽が鳴くと、こういう風に運んで変化してゆくけれども、その間に、匂いとか移りとかいう、その付け進んで行く味わいがそこに生まれてくると。これが芭蕉の連句だと、そで、こういう風にはこぶものは非文学だと。それじゃ松は松、岩は岩と別々に詠めば発句で文学で、これをそばへ並ぶればそれは非文学だと。それは子規が言ったことだから、皆、アア連句、あれは非文学だと言っていた方がえらい気が利いたようで、新しいと、そう思いちがえていると。けど芭蕉の連句はそういうもんじゃねえちうわけね、そんな事言つてはなした事があつたけど、その通りです。ほで、マア芭蕉の心法という何だだ、手紙をね晩山の所へやつた手紙が芭蕉の書簡集の

中には無論、ある。短い手紙だけだね、連句をやる者はたくさんあるが心法を知つてやるものはまことにすくないと、こういうね、遺憾であるちう、そういう手紙だね。

雅 その心法というのと、先程の付方十七体ですかね、先生からいただいたのは付方十五体になっていますね。それから付方二十三体というのもあるし、それからマア、八方自他伝もこの類でしょうか。

丈 其角や何か何したものにもそういうのがあるしね、いろいろあるだ。それでマアそうしたものも、ただ笑つてなんで、やつぱり研究した方がいいと思うのは、七名八体、あれも支考かな。で、あの几董はそれを用いてね、『手びき蔓』というね、短いもんだけど、それは読むべきものでね。それはいいだ。几董の『手びき蔓』。

雅 先生は何ですか、やつぱり七部集の中では「猿蓑」あたりが一番お好きでいらつしやいますか。

丈 やつぱり何だね、「冬の日」だね。

雅 あ、「冬の日」がよろしいんですか。

丈 「冬の日」だ。「冬の日」は何故てやね、付け運びも句柄もいいしね。あれは何だだ、貞徳以来のね、やかましい制約を蹴飛ばしてらだ。

「俳諧に古人なし」というはそれだだね、ウン。

其角（宝井其角）

俳人。榎本氏。寛文元年—宝永四年。四七歳で没。芭蕉門。江戸蕉風を確立した

几董（高井几董）

俳人。寛保元年—寛政元年。四九歳で没。京都の人。蕪村門

手びき蔓

付合手びき蔓。夜半亭几董著。天明六年刊。古来の名目にあてはめつつ、付合の作法心得を説いたもの

露伴（幸田露伴）
一八六七—一九四七。俳
文字者。小説家。芭蕉研
究の著書多し。露伴評釈
芭蕉七部集。

たそやとはしる
貞享元年刊の原本には
「たそやとはしるかきの
山茶花」と、はに濁点あ
り

錦風（勝峯錦風）
晋風の父

野水（岡田野水）
俳人。初め貞門、のちに
蕉門。名古屋の呉服商。
寛保三年、八六歳にて没。
冬の日の連衆として有名

雅 先生、それじゃ「冬の日」の最初の一卷だけですわね、いろいろ疑問に思うことをおたずねしながら、一卷をお教えいただけませんか。

丈 エエ。

雅 最初の巻の発句ですが、これは、狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉

幸田露伴先生によると、狂句こがらしという句はいかにしても続かない、とね。これは無理だからと言って、

こがらしの身は竹齋に似たる哉

これだけが発句だということにしておられますが、私はこれには反対で、わざわざ芭蕉がこの発句を字余りにしたところに新しみもあると思うのですが。

丈 エエ、そういう類の句がいくらかもあるで、それはまあ何だね、はなさなくて、やはり字余りで。

雅 そすと、これは勿論、自の句ですわね。

丈 無論、白の句、白にも白。

雅 それから、その次が

たそやとはしるかきの山茶花

丈 さ、そいつね、いろいろ説があるが、たそやとはしる、濁りが打つてあるね？ エエ、なかったかな。

雅 ここにはありません。たそやとはしる……。

丈 わしは、たそやとはしる、とこういう。そうすると勝峯晋風の親爺様の錦風は、走るといえばちうわけで、マラソンで飛んで行くようなのだけ走るといっちゃ、小走りにね走る、ね、かきの山茶花というのがね、さ、山茶花の花のハラハラと散る、その下を小走りに行ったとも、マア言えるが、わしから言えば、初めて尋ねるところはね、向うへしれるように何だ、山茶花の小さい花の一つ咲いている位のをね、笠の端へさしても来たか、と。はてな、芭蕉様ではないか、芭蕉さんでございますかと、小走りに言っただけという、その挨拶の付けと。

雅 ウン、なるほどね。

丈 芭蕉と野水と小走りに、芭蕉さんでござんすかちうわけだ。その小走りに出て出迎えた様だ、と。

雅 その風景ははつきりしないでも、とにかく笠に山茶花の花をさすか、かざすかしている一種の風狂の姿ですわね。

丈 風狂の姿だ。

雅 そりゃ、よく分かりますわね。

丈 常人はそんな事はしないしね。まあ、風流人かね、その位の事はする。わしども、はじめての所たずねる時にやね、駅へ行ってそれからどつちもまあ顔を知らない同士で、どやどやするところで蝙蝠傘をちよつとこう上にあげると、そうすると相手の人が、エ芦丈さんでござんすかちうわけだ。だで、笠へね山茶花をさして、その注意をひくためにしたとすりや、さ、そこがまことに二句の間がしっくりしてくるだ。

雅 すると、これは他の句。

丈 いや、それ自だだ。それは野水の自の句だもんだで、発句は芭蕉の自の句、脇は野水の自の句だ。

雅 なるほど。

丈 さ、それからその第三だ、第三がね、

有明の主水に酒屋つくらせて

と。するとマア野水が酒屋の主人であるかないか、それは分からないにして、酒屋の主人なんかじゃないけれど、それで、二句がまあ、そういう情景で、それからその付近で普請をしていると、大工がね、家を建てていると。それで、そうみただけで、その場はあんまり穿鑿しなうでね、第三の役目をしていると。それからどの註解でも、有明の主水と続いているからして、さあ、そのいろいろの有明の主水という何々があつ

大山体
第三の作り方の一種。中
七、下五をまず作ってお
いて、七五を上置きや
り方

た、有明の主水という酒屋があつたなんてね、そういつてしまつちや駄目で、第三は第三体というのがあつて。ほだで、有明のというのは後でかむらせたもので、別なものとして、主水に酒屋つくらせてという一句を仕立てて、それから有明の、とかぶせると大山体になるだ。ただ大山体というものは、そういうところに「の」の字の入つたのは本当じゃねえけれど、どうも有明をね、有明やとも言えんし、有明にじゃまずいし、どうも有明のというより外仕様がなからして、それを上の別の事柄とすりや、主水に酒屋つくらせてと主水というような事はまあ、大工や何でも親方の事を主水という場所もあるとか。それから何だだ、酒屋とすりやね、主水というその宮中の水の係りの役人、役目をいうとすりや、酒を造るにや水というものが非常に大切なもので、それで、や、うちのおやじの杜氏はね、あれはどうも神様のようだと。この水ならいいと言えば必ずいい酒ができる。ありや主水だという、その仇名にでもよばれている親父だというような。それから酒造る水はまあ、昔は山の流れ、川の水をね、それで昼間日光にあたると、硬度というものが大切なのに、その硬度が分解して軟水になつちまつたんじゃ酒にやいけないから、酒屋じゃ水を汲むに何でも夜明けに汲むと。すると有明に水汲む、無論、そのね、その頭に有明の、とかむせた事がやはり働いているわけだ。そ

れをまあ、何だだ、その幸田露伴の註解か誰のだったか、何しろ、その大工、肝煎大工が笠をきているからして、その下働きの者まで花笠をきて飛んで歩く。そんな脇にどこじゃええ、芭蕉のかむって来た笠、そんなもの、そんな所までね、もって行って講釈している。それ連句を知らねえから、そういうことをしている。そんな笠、そっちの方ですんでるだ。

雅 するとこの句は何でしょうね、表の月の定座をここにくり上げたわけでしょう。

文 そういうわけだ。それでそのくり上がりもね、一体、前句がまあ、そんな風で、冬の立句に冬の脇で、月を引き上げて来なけりやならんような場所でもねえけれど。

雅 そすと、これは荷兮が何か。

文 それはまあ、冬季へ有明だもんだで、秋だね。他季へ移るわけだけど、月というものは年中出ているからして、他季うつりには月が一番世話ないわけだ。

雅 すると、この自他の区別は自とも他とも取れるわけでしょうか。

文 主水に酒屋つくらせて、だでね。それは他ですね、エエ他ですだ。雅 そしてその次は、

荷兮(山本荷兮)
初め貞門、のち蕉門。本名山本武右衛門。享保元年六九歳にて没。芭蕉七部集の冬の日の編集をして認められた。名古屋の人

かしらの露をふるふ赤馬あかむま

ま、人情なしですな。

丈 エエ、景色をのべる叙景の句、場の句。

雅 そうですね。さてその次が、

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき

ここで問題になるのは、朝鮮という地名が表六句の中に出ますね、これは。

丈 それが大切のそこだ。それがその貞徳や何の定めた、そんなものにや一向拘泥しねえ。芭蕉独自のものと、芭蕉以前の制約や何に殆ど眼中におかないと、取るべきは取るけれど、とる必要のねえ所は蹴飛ばしている。そでて、

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき

というもんだで、朝鮮のとあるけれども、朝鮮へ行って見たわけじゃねえ、朝鮮から持って来たか、まあ、その細りすすきのというやせっぽなすすきの、という事で。

雅 すると、これも人情なしになるわけですか。

丈 にほひなき、というだからね、薄人情というもんだね。

雅 なるほど。

丈 うすい人情があると、自とも場ともとれるね。

(次の)

火のちりくくに野に米を茹
から裏の六句目、

あるじはひんにたえし虚家

までは、すでに前に述べてあるので省略する)

丈

田中なるこまんが柳落るころ

これはその場、という付けだ。

雅 その次、

霧にふね引人はちんばか

これは勿論、他の句です。

丈 エエ芭蕉の連句としてネ、柳に舟などというのは寔にその近い物付けのような風に言っているけどネ、それはそういう場所もあるけどね、それはあの、物から物へ移るために言ったもんじゃねえだでね、ウン。

雅 それは仕方がありませんね。物付けをめざしてやったんじゃない、偶然そうなったんですからね。で、その次
たそがれを横にながむる月ほそし

丈 そすると、その時、になるだ。

雅 その時、です。

丈 刻限になるだ。ひよっこりひよっこり綱引いてびっこのような様子がよく出ているだ。

雅 うん。

丈 それからその次が

となりさかしき町に下り居る

と。そすると、そこにいる人が眺めたことになるだ。

雅 はあ。

丈 それからね、

となりさかしき町に下り居る

ということからして、身分のある人がね、がやがやとした隣のうるさい所に、それでもって来て……。

雅

二の尼に近衛の花のさかりきく

丈 それで、二の尼というだからして、そのおり居る人は一の尼に相違ねえだ。同じ所へつとめていたのを、やめて陋巷にいと、そこへ二の尼が現われてくる。で、その近衛の花はもう咲くか、いつ頃咲くか、定

めしきれいに咲くでしょうと、いうような事をきくと。

雅 そすと、この二の尼の句の自他は何になるわけですか。

丈

二の尼に近衛の花のさかりきく

だからして、それはまあ二の尼がそこにいて、まあ自他半とも言えるね、ウン。それからして

蝶はむぐらにとばかり鼻かむ

そすると、その二の尼のお暇して出て行くところだね。

雅 そうですね。

丈 それで別れにのぞんで鼻かむ、別れが悲しい、まあ、自分がむぐらのような所におる、まあこんなところは面倒なところだね。

雅 ええ。

丈 註解をすると面倒な所だ。

雅 これは何でしょうね。一の尼の述懐、ととるべきでしょうね。

丈 そうです。

雅 うん、そうすると鼻かんだのをよそから見て描写しているわけだから、やっぱり他の句ですね。

丈 そうだね。

雅 それで名残の表に入って、

のり物に簾透顔おぼろなる

丈 別れた、やっぱりね。

丈 勿論、これも他の句ですね。

丈 他だ。

雅

いまぞ恨の矢をはなつ声

丈 さあ、その付けはどういうもんだか。その恨みの矢をどこへ向けるだか、乗物へむける、乗物へまあ矢を向けるちうようなことは、アノ何かあつたな。

雅 ないことはありませんね。何か天皇の輿か何かに矢を射こんだという話もあるだから。

丈 ええあるだ。何のね、香取神社かな、何かね剣道の何にそんなような事があるね。

雅 しかし何でしょうね、こういうちよつと突飛な句だけど、今までの抒情的な気分を変化させていますね。

丈 ええ変化させて、そういう句で変化するです。

雅

宗祇
連歌師。応永二八年―文
龜二年。八二歳没。『新撰
菟玖波集』の編者

義経・牛若丸（源義経）
幼名牛若丸。鎌倉時代
の武将、源義朝の子。一
一五九―一八八。平家
討伐に功あつたが、兄頼
朝にうとまれ、奥州に死
す

長範（熊坂長範）
承安の頃の有名な強盗

いまぞ恨の矢をはなつ声
だから、勿論、これは他の句ですね。そすと、
ぬす人の記念の松の吹をれて
というのはその場、その時ですか。

文 その場だ。

雅 場の句ですね。

しばし宗祇の名を付し水

文 そのまあ何だだ、記念の松の吹おれてというのが、義経と何のね、
牛若丸とあの。

雅 熊坂長範ですね。

文 そのまま面影が出ている、と。

雅 そすと、

しばし宗祇の名を付し水

というのは。

文 その松の付近に。

雅 やはり、その場の句が続きますね。

文 その付近に白雲水とかいう水が、今もあるそうだ。

雅 そすと、その場の句が二つ続くわけですね。

文 ええ。

雅

笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨

文 それはまあ、はるばるそんな所をね、訪ねて行った風流人だね。

雅 これも自とも他ともなりますね、次の付合で。

文

笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨

雅 まあ自ですか、自ですね。次は、

冬がれわけてひとり唐萱

ですか。

文 それは、その場の景だ。

雅

しら／＼と砕けしは人の骨か何

文 それもその何だね、唐萱のその畑に白々と人の骨だか。

雅 その場ですね。

文 その場にあるものを拾って付けた。

雅

鳥賊はえびすの国のうらかた

丈 烏賊の甲でね、人の骨だか何だか、烏賊の甲ちうやつもね、人の骨のようなものか何だか、やっぱり白いあんな物だからして、海岸の畑やなんぞね、そんなものがごみに混じって腐らなんて残っているわけだ。

雅 勿論、だから人情なし、場の句でしょうね。次、

あはれさの謎にもとけじ郭公

ここが、いつも先生が問題にされるところですね。
丈 それをね、えびすの国というのがあるから、幸田露伴はえびすの国へ行つて、そこでその郭公を聞いたことに説くもんだで、さあ、あと始末がつかねえだ。えびすの国じゃ烏賊の甲も占に用いると、ただそこで言っただけの事で、えびすの国へ行つてみたわけじゃねえだもの。行つたことに説いちゃ、そこはいけねえだ。芭蕉の連句はまあ実際から出るからして、行つていない所を行つたような句はねえだ。

雅 それは解釈はどうつくにしても、

あはれさの謎にもとけじ郭公

これは、自他の別はどうなるのでしょうか。

丈 無論、自だね。

雅 その次も問題の句、

秋水一斗もりつくす夜ぞ

李白

唐代の詩聖。字太白。六四歳にて没。酒客として知られる

丈山 (石川丈山)

三河の人。名は重之。初め家康に仕えたが京に帰り、詩仙堂に住む。狩野探幽に、中国三六詩人の像を写させた。寛文二二年没。年九〇

丈 その時、だね。それからその次、

日東の李白が坊に月を見て

雅 と。その秋水一斗は先生、何ですか、屋根の漏りですか、漏刻ですか。

丈 漏刻だね、それは。それで、漏刻の講義や何かは幸田露伴先生は細々とね、長々と説いてあるけれども、漏刻のことを覚えるためにはその講義、結構だね。連句というものの講義にはあんなこと言つてたんじゃ。

雅

日東の李白が坊に月を見て

これは、李白が坊とは……。

丈 石川丈山の面影。

雅 すると、これは他の句ですか。

丈 月を見て、だだね、これは自の句ですわ。

雅

巾に木槿をはさむ琵琶打

これは勿論、他ですわね。

丈 他だ。琵琶打をまあ、月見の晩に呼んで、その巾に木槿をはさむ、巾というのが頭巾じゃなしに、布をこうまくのがあるつてね、それへその木槿の花を挿したというような。

終
このしろ。幼魚を「こは
だ」、または「つなし」と
いう

雅
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに
これは、その時というわけですか。

文
そうだね、そのところ、気がかりな何だね、打越に月を見て、が
あり、夕ぐれと夜分の打越だね。

雅
箕に終の魚をいたゞき

文

わがいのりあけがたの星孕むべく

夕暮と言つといて、その打越へ、「あけがたの星孕むべく」と、時分の打
越だね。けど、あけがたの星孕むべくと言つても、今現に暁の星をその
場で見ているのじゃないとすれば、それでいいけどね。

雅
そこがちょっと。

文
そういうようのは、打越打越と言つてるからして気がかりになるが。

雅
この夕ぐれに、はやはりその時、という事になりますね。

文
そうだね、その時、だ。

雅

箕に終の魚をいたゞき

文
ま、その人というわけですか、これは他ですね。

文
他だね。

雅

わがいのりあけがたの星孕むべく

これは勿論、自ですな。

文
わがいのり、というからね。

雅

けふはいもとのまゆかきにゆき

文
それは眉かきに行く。自だね。

雅

綾ひとへ居湯に志賀の花漉て

それは眉をかくというような、世々の眉の図などいってね、いろいろな
眉をというような、だから、それはまあ民間の普通の人のすることじゃ
ねえからして、自然と綾ひとへ、というようなね。

文
それから、

廊下は藤のかげつたふ也

と。

雅
最後の句は、その場、ですな。

位の付け
一句に詠まれた人物、時代、場所による品位で、その品位をもって前句に付ける。余情付の一法

丈 そうだね。立派なその居湯を、居湯というのはお湯を桶で運んで来てね、その風呂釜で炊くようなものじゃないからして立派な家をあらわすために、廊下は藤の庭に面したような所のね、浴をする場所の立派なというのをあらわすために。

雅 こういう所が例の句付けといえますか、位の付けになるでしょうね。これでまあ、「冬の日」「狂句こがらしの」の巻を通観していただきましたが、全体として何ですね、「冬の日」の作品の特徴というのは、非常に、たとえば夷の国とか居湯とか、宗祇をもち出すとか、「猿蓑」や「炭俵」にくらべて調子が高いですね。

丈 そうです。調子が高くて、それで何だ、前から勘定して行くからね、表六句に有明の主水、官名だけど人の名が出る、朝鮮が出て来る、立句には竹斎も出る、そういうものを勘定して行くと、大変あるだ。

雅 近衛の花とかね、二の尼とか調子が高いですね。

丈 そういうものを古い連句から言えば、こんなものがこんなに出て来ちゃというような、それを芭蕉が前人の決めたことを眼中におかねえということ、それだけ名前やいろいろの物が出てくるからゴタついているかと思えば、決してゴタついていねえだ。「冬の日」の尊いところはそのういう所にあるだ。

雅 そうですね、非常に高い一種のロマンチズムですね、これは。

丈 うん。

雅 それはよく分かるわけですが。しかしまあ連句が民衆の間にひろがって行くには、こういう非常に高い教養を必要とする作品は、たとえば宗祇とか、近衛の花とか、李白とか、あるいは夷の国などは、どうでしょうか、すこしレベルが高すぎるのではないのでしょうか。

丈 そうだ、すこし教養の高い人たちの仕事になってくるだ。そうだね、それだから、あと段々にくだけて来る。

雅 「炭俵」まで行くわけですね。

丈 それで、「炭俵」みたいな平易というか、俗な俳語の流れがずっとひろまって行われるようになるよ。

雅 それがですね、江戸中期以後、あるいは明治、大正、昭和までも続くことになっておりますが、この際「冬の日」調をどう、私ども昭和三十八年時代の作品に取り入れたらよいでしょう。これをひとつ先生におたずね致したいのですが。

丈 そこだね、儂はそうなっても、一本調子になって、いつもかもそうではなくて、たまには調子の高いのも欲しいとまあ高いものも一巻の中一カ所か二カ所、まあ山ともよく言うがね、山というようなくとも欲しい

い。ところで、お目にかけたいたのが、これがまあ何だだ、XとYとがや
ったもの。

雅 ほほう、それはなかなか、大した方々が。

丈 それで儂ね、こうした連句はそりゃ骨折ってこせえて結構だけれど、
いわば肩胛を張りすぎて、これでもか、これでもかと言って言い通して
しまったような巻になり、もすこし波をうって調子の低い所もこしらえ
て、こういきたいと言ってやったわけですか。

雅 その発句はどういうものでしょうか。

丈 発句はね、

今日は白き雲と遊べり水馬みづま

雅 はあ。

丈 つまり雲のかげかね、真白な雲の影が水へおちこんでその上を水馬
がツツとやっていると、それから脇ね、

早ものかは茂る庭草

と。うん、するとまあ庭の池かなんかと、まあ、これを見付けたもんで。
すると第三が、

記紀にひそむ神話の骨子呆として

すると今度は、

月中の人口中の人

とこんな風な。

雅 随分調子が高いですね、すばらしいですね。

丈 うん、その高いのがね、仕舞までこの調子で行ってるだ。

大砂丘垂るる銀河の尾に続き

と。

雅 はあ。

丈

駱駝の峯にわるる秋風

駱駝の峯もねちよつと、駱駝のまあ、あの瘤だね。ははあ、それに秋風
がわれると、それからしてね、ウラ、

一童がトランペットをにくきまで

病む母もちて売れぬ原稿
だ。

瞳然と東京タワー灼くる日に

油流して上る小蒸汽

古人詠みし月の雫の釣葱

英雄の血も含む蚊の腹

それからね。

雅 相当、「冬の日」調ですね。

文 ええ。

お天守を支へし石の牛蒡積

御声凛々しく開く国体

それからね、

蜜月旅行列車ホームを離れたり

山に送られ海に招かれ

と。こういう句は面白いけど、それから、このうちには一句として、また付けとして面白いところがあるけれど、何しろこの調子で始めから仕舞まで肩胛の張りくらで、これでどうだ、これでもびっくりしねえかと、というような気持でやってくからして。

雅 そうですねえ。

文 それから、初折の花の句、

花に詠む花鳥余情の水のごと

風暖かに芽ぐむ楓林

執筆

と。まあ、こんな調子で、これじゃちつともやわらかみの所がなくて、肩胛の張りくらといったもんで、こういうものじゃ、いい連句と言えねえだ。

雅 ところで、私たちの会のやり方ですね。マ、出勝といますか、あれでずつとやって来たわけですが、あれはまあ、あのままでよろしいでしょうか。

文 ま、大勢でならうとすれば、やっぱりあれは続けてね、あの何ですだ、両吟とか三吟など、円熟社の連句会は幾人集まろうともね、やりかけの巻がね、幾つもあつて、五人居りゃ五人が一冊ずつ持つて付けると。雅 それは独吟で。

文 独吟じゃねえだ。こういうのへ持つていつてね、付いているのをこ

う順に回して、手のあいた人のところへ又やる。

雅 はあ、それは相当皆が熟練してないと駄目でしょうね。
文 そうですだ、熟練しない人はただ手間とっているだけです。ね、ほだで、一日やっても熟練しねえ人はね、二句か三句しか付かねえような人もあり、それから熟練した人、早い人は付けてはまた次のあいた巻を順にやるからして、一日はこんで何句も沢山付いてると。そいだで、やりかけの巻を沢山こせといてね、それでその会の日にもち出しちゃね、そのうち今日は何巻満尾したとか、時によっては一巻も満尾できねえ時もあり、それから満尾すると又一巻たて、二巻たてるといいうようにして。そだで、毎月のように、時によりや月に何回もやる時もあり、それで一

円熟社
信州伊那の俳諧師・馬場
凌冬（明治三五年没）が
作った俳諧結社

両吟
二人で付け合う

三吟
三人で付け合う

年には付込の満尾したのが何巻も出来るわけだ。

雅 あ、二十日におやりになるのはそういう……。

丈 二十日は発句の会です。

雅 ハア、発句の会、アアそうでしたか。と、連句の方は日を決めないで。

丈 連句の方は、元は五日と決めてあったけどと、ハア五日に都合がわりい、その次といった具合でね、今じゃほとんど不定期になってるだ。

雅 するとまあ、都合のよい日に廻状か何かまわして、皆をお集めになる。

丈 そうだね。いつ、どこそこで連句をやるぞと。それで多くよる時は八人ぐらいの時もあるしね。今日はすくないな、四人きりだという時もあり。

雅 はあ。

丈 それと何です。各自がもってる両吟だね、儂相手の。それもその日に持つてくるだ。

雅 それは大変ですね。

丈 今日はまあ、この方はやつてられねえで、多勢だでというような、小勢の時にはその両吟も、手の空いた時には付けて。

雅 それは仲々大変ですね。そすと、東京には都心連句会、伊那にはこ

都心連句会

昭和三四年より根津芦丈
門下の清水瓢左、野村牛
耳、池田豊城、田村無徑、
大林柚平、三井武翁

の円熟社の方たち、松本にはこの信大連句会、それから松代にもグループがあるんですか。

丈 うん、あるです。松代でも来いちゆうような事を始終いうけれど、仲々そうあそこまでは行けねえしね。

雅 ちよつと遠いですね。

丈 東京はまあ来い来いというけど、これまたよけい遠いし。

雅 じゃ、僕たちが一番恵まれているわけですね。もつとも伊那の方が一番だろうけど。

丈 エー、この位の回数、何だね、都心連句会第七十二回なんてね。

雅 ほう。

丈 それでね、集まる人たちもフンフン、この武翁（三井武夫）というはね、何だお役人（農林中金理事）でね。去年、欧米漫遊して来てね。

雅 ほう。

丈

夏痩せて戻る欧亜の五十日

という立句でね、この時は馬骨、馬骨というのはね、脚色家でね、千切幸歳と。

雅 脚色家ですか。

武翁（三井武翁）

都心連句会。明治四四年
—昭和四三年。五八歳。
東京生れ。本名「武夫」

馬骨（千切幸歳）

脚色家。都心連句会

雅流（川崎雅流）
都心連句会

豊城（池田豊城）
都心連句会。明治四二年
一昭和六年

杣平（大林杣平）
都心連句会

ホトトギス

俳誌。高浜虚子主宰。明
治三〇年一月創刊

虚子（高浜虚子）

俳人。明治七年一昭和三年。
愛媛県の人

夜店のステッキ

一卷の中に、丈高くすば
らしい句ばかりが並んで
いる作品をいう

丈 アア、大きな体の人だね、脚色家として大した人です。それから、

この雅流（川崎雅流）ね、雅流、豊城（池田豊城）、杣平（大林杣平）、
こんな人は皆、ホトトギスの衆だね。虚子門の衆が六人入ってるですわ、
この中に。それで僕は今日のような話をね、たまたまするとね、虚子先
生はそんな話はちつともしてくれねえ、ちつともしてくれねえって。そ
りや、ただ書物でやってるか、まあ、それで儂馬鹿にしちゃね。ま、虚
子先生の巻いた連句は夜店のステッキだなんてね。一句一句にや、そり
や新しみがあって面白い何だけど、付味というものに至っては、どうも
しようがない。ならば行って行ったきりで、自も他もありやしない。それで
儂や、夜店のステッキ、一本一本ならべだ、と言うけど、ハハハハ。そ
れでまあ、虚子門の連中がね、よろこんで集まるです。この雅流とい
うのが、大きな会社の常務でね。

雅 ホウ。

丈 その事務所が青山の表町にあつて、その二階にいい座敷があるだ。
重役会をするところ、それをへエ、いつでも貸せるからして、そこを宿
にして、やつて、それからお弁当でも何でも取つて、今日は何するなん
てってね。そこでやつて帰ると、それからわしゃそこへ泊めて貰うだ。
ウン、その座敷へね。そするとその食堂があつてね、食堂夫婦でやつて

おつて、その会社の独身の人たちが幾たりばかりいるかね、十五、六人
もいるかしらん、その事務所の建物の続きにおつてね、その衆の賄いを
一切夫婦でね、食堂やつてるもんで、食堂へ下りて行つてみりや、いや、
大した食堂でね。そで、儂泊まつても何にも、ちつとも困りやしねえ
だ。

雅 なるほど。

丈 ほだで、都合がいいです。

雅 じゃ、東京にかれこれ十四、五人ですか。

丈 そうだね、皆集まりや、ま、十幾人だ。マア海音寺潮五郎さんの所
にね、一ぺん行つて出勝でね、一卷やつたその時にや、幾たりばかりだ
つたかな、七人か八人集まつたか知らん。馬骨さんも来るとかね、南山
なんて中沢丞夫そういう文士の連中、それから葱嶺なんてね（清水正二
郎・胡桃沢耕史）、鎌倉から来る。それからしてね、毎日新聞のサンデー
毎日だかの記者の人も来る。それで来たところが、何しろ潮五郎さんは
原稿書きに忙しくてね。夜中まあ書いて、それからまあ十時ごろでなき
や起きない。起きるともう原稿の催促が二人、三人も来ていてね。それ
だで、その時の巻も半ごろから漸く出て来て、二、三句付けたんだが、
その後、潮五郎さんの家を宿にして何回やつたか、奥さんが嫌だという

潮五郎（海音寺潮五郎）
小説家。都心連句会

丞夫（中沢丞夫）

葱嶺（清水正二郎・胡桃
沢耕史）